特選

叔父の家無住となりて三十年
父子草咲き母子草咲く

東近江市　小林　清次郎

（評）この様にして無住の家は増えて行くのだろうか。叔父さんが住まなくなって三十年の歳月が経つ。父子草が咲き母子草が咲いてる庭に昔日の面影を見たのだろうか？切なさと虚しさが伝わってくる。

特選

点滴のポトリポトリと落ちてゆく
速度は寿命の尽きゆく速度

開出今町　掛田　洋子

（評）点滴がポトリポトリと落ちてゆくその速度は、あたかも病人の寿命が尽きてゆく速度であるという。ふかい視点から人間の終（つい）を見つめた作品。点滴の速度と寿命の尽きてゆく速度を重ねた重厚さがある。

特選

風さやかメタセコイヤの並木道
友と出で立つビワイチの朝

外町　筑田　弘正

（評）観光と健康を目途の施策「ビワイチ」の企画に参加の朝を活写。健やかな笑み、喜びが漲る。メタセコイヤ並木も友との心弾みも県の企画の本質に満喫の健康溌剌の作者のプロフィールも含め評価する。

入選

大雪に折れたる椿枝（え）にそつと
はり金をそふ蕾ふくらむ

犬上郡甲良町　上田　八重子

（評）大雪により大切にしてきた椿の枝が折れてしまった。その枝に針金をそえた枝先にぷっと蕾がふくらんできた。無駄のない簡潔な文体で愛しさを掬い取る。

入選

鎌二丁と動く腰かけ買いくれて
「無理せんときな」息子の言うも

犬上郡甲良町　村岸　千鶴子

（評）鎌二丁と動く腰かけを買ってくれた息子、よく気のつくのに感心する。そして、「無理せんときな」がまたよい。息子の本音がよく出ており、飾り気のない表現が共感をよぶ要素となっている。

入選

しなやかに火箸を持ちて炭をたす
母の面影残れる座敷

本庄町　田口　洋子

（評）上品でたおやかな佇まいであったであろうひと昔前の母の姿を、火箸と炭を具体的に読み込むことで深みのある一首となった。

入選

「生きる道」を持ちて訪いくる人美（は）しき
汚れしわれのこころ羞じいる

堀町　河分　武士

（評）「生きる道」という栞を持って訪ねてくる人は美しい。これは心の美しさだろう。従って作者は汚れた自分の心を羞じているのである。こうした機会のあったことは喜ぶべきである。

入選

初投票こさめの中の制服は
投票場の視線あつめる

東沼波町　石井浪栄

（評）人生初の投票権を行使する少女への温かい眼差しか。記念すべき折角の歌材を詠みきっていないことに残るものがある。何事であれ「初めて」はいつも欠落を伴うものなのであろうか。

入選

雪の夕君の育てし大根の
太き二本を抱きて帰る

松原町　北川満代

（評）下の句の抱きて帰るに君への想いが切々と伝わってくる。上の句はこの気持ちを表現するための導入部。具体的な表現と結句に今この時の意味をたしかめる。

佳作

リフォームの見積り取って驚きし
我の命の果てを数えり

地蔵町　佐古徳子

佳作

雪を掻く朝の区切りのひと掻きに
「ご飯ですよ」の声が被さる

芹橋二丁目　古池陽彦

佳作

三方の鯉を哀れみつつ直会の
鮪の鮨に箸ですすみたり

長浜市　近藤甚一郎

佳作

躓いてつまずいて得たこの手摺心に
潜む亡き夫のこと

鳥居本町　寺村美惠

佳作

そんたくを変換できぬケータイに
見せてやりたい国会の記事

長曽根南町　日比野美鈴

佳作

冬至の湯柚子浮ばせて百数ふ
柔き頬っぺの吾子は六才

長浜市　樋口　満智子

佳作

鮎の跳ね上るウロリの連なりを
も一度見ましと思ふ流れに

本庄町　田口　敏子

佳作

ひとり寝のわが髪撫づる気配する
はや風となり亡君（きみ）の守（も）れるか

日夏町　石原　不二子

佳作

夫病みて琴止めようと思いしに
息子（こ）は続けよとしずかに言えり

犬上郡豊郷町　森　典子

佳作

サッカーの子らの喚声湧き上る
戦没者墓碑山陰にありて

日夏町　成宮　恵津子

佳作

蹟くな風邪を引くなのメモ添へて
娘が置きくるる鹿尾菜の佃煮

馬場二丁目　清水　はる

佳作

「またもろた」挨拶となる春の雪
マンホールの蓋より解け始めたり

米原市　西尾　辰之

佳作

わかばマーク男孫外せりシルバーマーク
われは今日より車に貼れり

日夏町　寺村　享子

佳作

「おはよう」と写真の彼に声かけて
今は一合の米を炊くなり

犬上郡豊郷町　那須　洋子

佳作

よく見ればカーテン越しに小雪舞う
幾度眺めて息子の来るを待つ

下西川町　北川　和子

佳作

夜遅く帰り来る息子に「おかえり」と
チラシの裏に書きて寝ぬるも

高宮町　細田　惠貢子

佳作

日の短か子が読める字の置手紙
母はパートで遅くなりけり

大藪町　是沢　卓

佳作

バラ剪定鋏持つ手が迷っている
この芽この枝果敢なき別れ

古沢町　野洲　令子

佳作

初めての参観まごの手作りの
地図をたよりに教室さがす

長浜市　山田　静子

佳作

果てしなき言葉の海や操る度に
子の買ひくれし辞書匂ひ立つ

古沢町　大橋　しず

佳作

天守閣はるか眼下に舞う鳶の
遮るものなし如月の空

平田町　曽我　伸子

佳作

八十路坂早やもきたかとふり返り
良き日荒れし思い出つづる

稲里町　勝見　政恵

佳作

里山に猪網垣の巡らさる
進入禁止の文字は無けれど

稲里町　野瀬　善一

佳作

残雪の横山岳を望みつつ
初振りスティックに力籠めたり

長浜市　谷　幸子

佳作

如月の闇より出でて追ふ勢子も
追はるる鬼も火の海のなか

正法寺町　髙井　豊

佳作

老二人手をふれ合いし日々遠く
介護のいらぬ今がしあわせ

東近江市　坂口靖子

《総評》

短歌は説明や理屈の器でないことは自明の理。詠み手には感覚、感性の器の自覚が必要です。日常の膨大な刺戟の中の感受性の問われる詩です。詩は見聞や感動に説明をしたり、尾鰭を付けたりするものではありません。

また短歌には声調の美しさが要求されます。「本当のものを伝える」「余計なものを取り込まない」作品には無限の魅力を帯びることは言うまでもありません。さらに、言葉を命とする文学である限り、言葉の修養としての表現技法の訓練も不可欠です。身辺の洪水のような短歌に触れることも大事な活動です。そこから立ち上がるのが現代の人間像でしょうか。

日常を踏みしめて詠む今こそ、各位の新たな一歩、確かな一歩となりますことを。

木村　光子

短歌が花鳥風月詠から生活詠へと移行して久しいが、どうしても自然の四季の美を詠みたくなる。さくらが咲けばさくら、もみじが色づけばもみじが詠みたくなる。その時その表現のなかに、生活的な内容の有無が問われる。本年度の応募作品の選歌をしたが、たしかに日常の生活を詠んでいるが、その大半は日常の瑣末詠である。生活詠の本質は生きるということ、生命ということである。そうした重みやきびしさが無くては真の生活詠とは言えない。

作品を再三読み返してみて、果たして生活詠という主題を全うしているかを確認する必要がある。中々自分の作品の良否の判定はむつかしいものだ。そうした時は短歌を作る如何にかかわらず、家族でも友人でもいいから見てもらうことである。こうした意味で私も妻に時々見てもらっている。

総評としてはもう少しふかい視点から素材を見つめ、マンネリ化から脱出してほしいと思う。

小西　久二郎

今回お寄せいただいた作品は、自身の高齢や亡き人、家族との関係や思いを描いた歌など多彩な作品が寄せられました。

短歌は一人称の文藝ですから作者自身が感じたこと考えたことが主題となりますが、そこで大事なのは、言い過ぎないということ。わかってもらいたいという意識が強すぎるとついつい説明をしてしまいがち。

ここに滋賀県ゆかりの歌人河野裕子さんが語られていた次の言葉をご紹介して一考としたいと思います。

『一番伝えたいことを言わないように作るのが大事ですね。自分の思いを6ぐらいに押さえて、4ぐらいの空間を残しておくと、読み手がいろいろと読んでくれます。じわっと井戸水がわくみたいに歌の器を満たしてくれる。歌は読み手がいてはじめて独り立ちできる詩形だということです。』

宮本　照男

選者吟

書棚よりつと貌を出す智恵の輪の
案の定解けざる　陽春の鬱

木村　光子

痛き足引きずりながらの菊づくり
われがわが身をあはれみてゐつ

小西久二郎

夕暮れの金亀の城の老木に
四百年の風の私語あり

宮本　照男